特60
555

№ 11326

河内判官楠正成の父は正玄と云母は毘沙門へ願をかけ一子をうり此神の化身なり人と幼名を多門丸と云ふ成長して軍学に秀ぬ此ぞ北条高時政を

専らにし驕奢限りなく
万民くるしみけれど天
皇震怒し高時を誅
滅せんと正成を召し
倫と目を賜ふ正
成赤坂に城を
きづき坊禦の手
配をあに賊兵州六
将をして後醍醐天
皇を笠置に
うこみ戦
ひつふに
陥入帝ハ
ふじふさと

神器を
奉じて
赤坂に
至り給ふ
正成ハ弟
正季と兵
を分ち奇
計を以て
果軍を悩
ましけれ
ども上せて
大軍故又
また計略

以て正
成討死
の体に
なして
逃れいで
金剛山に
至りける
に賊軍ハ帝
を宇治に執
へ奉つり隠
岐に徙し奉
つりける正成
たゝらごとを以て

赤坂の守将湯浅を降し是より楠のいきおひ日々に加りける帝ハ千波の港より船にて隱岐をのがれ伯耆の国にうつりとまふ実に正慶二年なりこれより先鎌倉をせめおとしくらミちの河水漲り

□八相州鎌倉へ押よせ城を

天王寺に進み諸将を打退ぞけ千窟の城をきつきとてこもる東軍しきりに攻るとゝへども固より兵器を以て敵をあざむき釣

兵を以て敵をやしなひ謀計機に中らざるこゝとなし

新田義貞

とくられぎるに諸兵こまり
けるを義さど自らいのりて金つくりの太刀を河中に投じけれだに

とろに河水
滅じけれだ士卒大によろこびついに河をとたり北条高時をうち亡ぼし足利尊氏ハ六たらを討ち平らげ名和長年ハ主上を守護して都にうへり四海皆王威に伏せざるハなし

方里小路藤房卿ハ正成を招き今天下少し干戈の止しも大乱近きにありとあげきけれ忠正しげ涙をおげしたとひ今天下逆賊ゐるも正しげ死せざるうぎり

りむ必ず賊をして志ざしを得

せしむべ
うらぶし
くれ
ども
勝敗
命あり只死にあ
りと藤房其忠勇
をうんじ
けるうくて尊
氏公再び政令を
乱し帝をあまどり
ければ天皇正成を召

して賊軍誅伐の事を命
じ義貞を以て大将と
し正成ハ
尊氏の兵
をしぞく
やぶり
ついに
西に
走ら
に
こ
に

楠公
いて正成ハミやこに止り義貞を
して山陰道十六国の軍事を総督
せしめ尊氏を征ぜつせしむ
ちうてよし貞白旗城をう
こみ弟脇屋義助をし
てさんいんどうを伐しー
む義貞の軍利あらぶ
うつ足利尊氏ハ
九州の兵
一百万ホ
どをひき
南公

ひて再来
にときゝ
義貞白旗城の
うこみをといて

兵庫にぢんに天皇
詔のりして楠正成
をして新田義貞をと
すけしむ正成謀りご
と奏にとゝへど
も参議坊門の
清忠しうら
とせばよ
つ豫
じめことの成ざるを知り
櫻井駅にて一子正行に遺訓し倫理肝短刀をあとへ
恩智左近と共に帰らしむ正つらあげき共に戦に

生ける者は死し死せる者は生る
ことわりなり
正しげ
家に入て自刃して死
兵庫湊川において
刀を戦軍に殺害
正行を河内に帰り
四海万国の知る所
兵庫に祭る湊川神社是
今

明治廿年六月廿日印刷後功
同年七月十日出版
定價金六錢

印刷兼發行者 京都府平民 中村茂吉 上京区第三十組 九番地第廿三番戸
著作者 京都府平民 甲斐山久三郎 上京区第三十組 九番地第廿三番戸
賣捌人 大阪書林 岡本仙助
同 大阪書林 競爭屋